

沈黙の春、コロナの春

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

2020年春、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により人間社会は沈黙した。沈黙の春である。沈黙、春といえば、レイチェル・カーソンの「Silent Spring」（1962年出版）で、化学薬品の生態系汚染を世に知らしめた警世の書である（邦訳第2版「沈黙の春」は1974年出版）。新米教授時代に読んでその内容と筆力に圧倒された記憶がある。

本書の冒頭には、アメリカの仮想的なある町一周辺に豊かな田畑が広がり、小高い丘の斜面に果樹が繁る一に訪れた春の風景が述べられる（第1章 明日のための寓話）。寓話と称しながら、内実は本書に綴られた夥しい災厄の具体的事例を重ね合わせたものである（以下に要約）。

春には緑の野原、彼方の花霞、秋には綾なす紅葉に松の緑、鹿が野を駆け、丘の森には狐が棲む。道を行けばアメリカシャクナゲ、ハンノキ、オオシダが続き、四季折々に野の花々が咲き乱れる。冬、雪から頭を出す枯れ草の実やベリーにたくさんの鳥が群がり、春と秋は渡り鳥の洪水で大勢の旅人が訪れる。山から流れる川は澄み、淵にはマスが産卵し、釣り人も多い。

ところが、前代未聞のことが起こり始めた。多くの若鶏が、牛や羊が原因不明の病気になって死に、人にも見たこともない病気が発生し死者も出た。春が来たが、沈黙の春だった。多種多様な鳥の鳴き声が響き渡るはずの春の夜明け、いまはもの音一つしない。野原、森、沼地一みな黙りこくっている。農家では鶏が卵を産んだが、雛は孵らず、豚には小さな子ばかり生まれ、2、3日で死んだ。リンゴの木は溢れるばかりの花をつけたが、花粉を運ぶミツバチの羽音はない。道端の草木は茶色に枯れはて、訪れる生き物の姿もなく、小川からも生命の火は消えて、釣り人の影もない。

庇の樋の中や屋根板の隙間には、白い細かな粒々が溜まっている。何週間前のことだったか、この白い粒が、雪のように、屋根や庭や野原や小川に降りそそいでいた。新しい生命の誕生の声はもはや聞かれない。全ては人間が自ら招いた禍だった。（以上、第1章要約）。

本書は、虫（疾病伝播性昆虫、作物害虫）や雑草退治のために、1945年前後から、次々と製造、販売された‘塩化炭化水素系’のDDT、クロールデン、ヘプタクロール、ディルドリン、アルドリン、エンドリンなどの化学薬品、また‘有機リン酸エステル

系’のパラチオン、馬拉チオン、ペンタクロロフェノール、アミトロールなどの薬品が、撒布剤、粉末剤、エアゾールとして畑、森林、庭園などに大量投与され、土壌、地表水、地下水、森林を汚染した多くの被害事例を綴ったものである。

著者はまた、世界の全ての生物は相互に依存する生態学的関係にあること。従って毒物（殺虫剤）も1つの輪（生物）から他の輪（生物）へと連鎖的に広がり、人間もまた接触、吸引、食物などを介しその域外ではありえないこと（第12章、人間の代価）。一方、昆虫は自然淘汰という手段により、次々に開発される新しい薬物への抵抗性を獲得しており、いまや塩化炭化水素系のみならず、リン酸エステル類も無効となっていると述べている（第16章、迫り来る雪崩）。

一転して、人間社会を沈黙させた今春のコロナウイルス禍である。中国・武漢市の一隅に出現した新奇コロナウイルスの流行は、瞬く間に近隣諸国に飛び火し、欧米諸国で爆発的流行を引き起こした。人類は、社会的、経済的、文化的諸活動を止めた。

流行の発端となった中国武漢市、次いで流行の拡大した欧州諸都市では次々とロックダウン（都市封鎖）が宣言され、人々の外出、移動が禁止された。新聞紙上にみる、人影の途絶えた、武漢市の大通り、パリのシャンゼリゼ通り、ニューヨークのタイムズスクエア、ロンドンのトラファルガー広場、かてて加えて緊急事態宣言下で外出控え要請のなされた、東京の渋谷駅前スクランブル交差点、あり得ないことが現実となった光景にわが目を疑った。道都札幌でも、知事の全小中学校の休校要請、緊急事態宣言と週末の外出自粛要請により、すすきの繁華街から人影が消えた。以来ほぼ半年、人間社会は依然として活動を狭め半ば沈黙を強いられている。

中島公園の傍らに住み日課の散歩を欠かさない私にとって今年の春は格別だった。散歩する人とならない公園、人間界と自然界の対比が際立った。季節の進行とともに、早春の芝生が萌え出で、木々は芽吹いた。まず白・薄紫のつつじが開花し、次いで辛夷たちが眩しいほどに白い花々をつけ、さらに黄色の連翹も鮮やかに咲きこぼれては散った。人間社会が一切の活動を止めて静まり返る中、鴉の鳴き声、雀の囀りは一段と明るくのびのびと響き渡った。菖蒲池を悠然と行き交う渡り鴨の鳴き交す声も一際大きく、キラリと光り身を翻すうぐい、水面にぷかりと浮ぶ亀の姿もわが世の春を謳歌しているかに見えた。全ては人目に触れない徒な春であった。

人間の行為（化学薬品投与）による自然界の沈黙、新奇コロナウイルス（感染蔓延）による人間界の沈黙、共通のキーワードは地球生態系であり、人、ウイルスともに生態系の一員である。多様で複雑な生態系についてほとんど何の知識も持たぬまま我が物顔にふるまってきた人類が、初めて出くわしたコロナウイルスの蔓延に慌てふためき、その行く末を見通せないのは無理からぬことであろう。